

千葉県バイオ・ライフサイエンス・ネットワーク会議 令和８年度 総会・事例報告会 報告書

1 日時

令和８年７月６日（月）午後１時００分～午後４時１０分

2 場所

ペリエホール RoomA

（千葉県千葉市中央区新千葉１－１－１ ペリエ千葉７階）

3 概要

（１）総会（午後１時００分～午後１時２０分）

本会議の主催者である千葉県バイオ・ライフサイエンス・ネットワーク会議 田畑会長（（公財）かずさＤＮＡ研究所理事長）及び共催者である千葉県商工労働部 関部長からのあいさつに続き、事務局から令和７年度事業報告、令和８年度事業計画の説明を行いました。

〔田畑会長〕



〔関部長〕



〔事務局説明〕



〔総会の様子〕



（２）事例報告会（午後１時３０分～午後４時１０分）

「食と農を変えるゲノム編集―研究から社会実装まで―」をテーマとして４題を紹介しました。

講演 1

演題：「食のバリアフリーを実現するアレルギー低減卵の社会実装」

講師：プラチナバイオ株式会社 代表取締役 CEO

一般社団法人バイオ DX 推進機構 理事・統括コーディネーター

広島大学ゲノム編集イノベーションセンター 客員教授

奥原 啓輔 氏



【発表要旨】

プラチナバイオ株式会社は、「バイオテクノロジーで未来を拓く」というビジョンを掲げ、生物機能をデザインして社会課題を解決する取り組みを行っており、本講演では、「食のバリアフリーを実現するアレルギー低減卵の社会実装」を紹介されました。『食物アレルギーの悩みを抱える人々を、少しでも笑顔にしたい。』この想いに共感した大学、企業、医療機関からトップランナーが集結し、オールジャパンの産学共創により、グローバルな社会課題の解決を目指している旨を講演されました。

講演 2

演題：「国産ゲノム編集技術 TiD とは?—作物・植物での活用—」

講師：東京科学大学 生命理工学院 教授

刑部 祐里子 氏



【発表要旨】

ゲノム編集は、生物資源開発や医療応用など様々な分野へ活用される基本的な遺伝子改変技術となりました。講師は TypeI-D CRISPR-Cas を活用した独自のゲノム編集 TiD を開発し、多様な生物を対象としたプラットフォーム開発研究を推進しています。本講演では、高活性型 TiD-X の特性を紹介し、新規の有用形質をもつ植物創生への取り組みを説明されました。また、ゲノム編集有用作物の創生において、将来の実用化を目的とした開放系実験の届出に向けた品種創生について紹介されました。

講演 3

演題：「ゲノム編集食品をどう伝えるかー科学技術コミュニケーションの視点からー」

講師：東洋大学 食環境科学部フードデータサイエンス学科 教授

氏家 清和 氏



【発表要旨】

食を取り巻く環境が大きく変化していく中、食料供給の頑健性を高めるために新しい技術の活用が求められています。一方で、技術をめぐる賛否の対立が先鋭化し、導入が妨げられるケースもしばしばみられます。

本講演ではゲノム編集など食品の技術に関する情報提供による消費者の態度変容や意思決定プロセスとの関係についていくつかの研究事例をまとめ、どのようなコミュニケーションが求められるか等について紹介されました。

講演 4

演題：「ゲノム編集農作物を社会に届けるための取り組み」

講師：国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構

生物機能利用部門 研究推進部 ゲノム編集推進室 室長

安倍 史高 氏



【発表要旨】

作物の品種改良は、収量の向上や安定生産を通じて私たちの食を支えてきました。近年、品種改良を加速化・高度化する技術としてゲノム編集が注目され、国内でもルール整備が進み、実際に流通する農作物が現れ始めています。

本講演では、ゲノム編集農作物の研究開発の現状を紹介するとともに、社会実装に向けて直面している課題とその解決のための取り組み、特に国民理解醸成のための情報発信の重要性について紹介されました。

（３）その他（午後４時１０分～午後４時３０分）

かずさ DNA 研究所の小原副所長よりかずさ DNA 研究所と千葉大学等の共同プロジェクトに関する情報提供を行いました。

その他、講師への質問や名刺交換など、活発な情報交換を行いました。

〔事例報告会の様子〕



以上